

# トマス・バビントン・マコーレイ 「インドの教育にかんする覚書」の解説と翻訳

加 藤 洋 介

## 年表

- 1757 プラッシーの戦い
- 1772 ヘイスティングス、初代ベンガル総督に就任
- 1813 東インド会社特許状更新に伴うインド統治法改正
- 1833 ベンティンク、初代インド総督に就任
- 1835 マコーレイ「インドの教育にかんする覚書」
- 1857-58 セポイの反乱
- 1858 イギリス、インドの直接統治を開始

## 解説

「インドの教育にかんする覚書」でトマス・バビントン・マコーレイは、英語教育を通してインドを近代化する必要を説き、「血と肌の色においてインド人だが趣味と思考と道徳と知性においてイギリス人である集団の形成」をよびかけた。これは、イギリス帝国のコロニアリズムの一面を簡潔にあらわすものとして、今日のポストコロニアリズムの文章でしばしば引用される。たとえば『想像の共同体』でベネディクト・アンダソンはこれを引用し、「口にするもおぞましいことば」<sup>1</sup> だと言う。『文化の場所』でホミ・バーバは、イギリス式の学校教育を通してイギリス人の「模造人間」<sup>2</sup> を育成するコロニアリズムの欲望をここに見る。このような文章を通してマコーレイの発言は彼の議論のコンテクス

トから切りとられ、断片として流通するようになる。刺激的な表現に注目が集まることは自然だが、ことばの断片は単純な思考に還元されやすい。あらためてマコーレイの文章の全体とその歴史的コンテクストをふり返る価値はあるだろう。

イギリス帝国のコロニアリズムと言っても、女帝ヴィクトリアがロンドンでイギリス君主に即位したのは1837年、「インドの教育にかんする覚書」の出版の2年後である。当時イギリスのインド統治を担ったのは、エリザベス一世の時代からイギリスのアジア貿易を独占し、主に香辛料と織物の売買によって巨万の富を築いた東インド会社だった。東インド会社は軍事力を備え、1757年のブラッシーの戦いでフランス東インド会社の支援を受けたベンガル太守の軍隊を破り、その後カルカッタを拠点としてその支配圏をインド全体に拡大した。イギリス帝国がインド全土に領土を拡大した歴史を、大ざっぱに1757年から1858年の直接統治の開始までの1世紀としてとらえることができる。

このあいだに東インド会社はインドの教育にも関与した。その初期の教育政策は東洋の言語と宗教と法律の教育を重視した。1772年に初代ベンガル総督に就任したウォレン・ヘイスティングスは、1781年にイスラム法の研究機関としてカルカッタ・マドラサ大学（モハメッド大学）、1792年にサンスクリット語の教育の拠点としてベナレスにサンスクリット大学を創設するなど、インドの高等教育の発展に尽力した。これらの大学はオリエンタリストとよばれる研究者の養成機関として機能し、インドの文献の英語翻訳を奨励し、いわゆるオリエンタリズムの文化を育んだ。数々の二言語辞典が出版され、比較言語研究が活況を呈した。サンスクリット語がギリシャ語とラテン語と共通の起源をもつことを明らかにしたウィリアム・ジョーンズの有名なインド・ヨーロッパ語族の発見はこのころである。ジョーンズは1784年にベンガルにアジア協会を設立し、東洋の文学と芸術と歴史の研究を奨励した。

東インド会社が初期に英語帝国主義を積極的に推進しなかった理由は、第1に、その支配に対する抵抗の拡大を懸念したことである。言うまでもなく、植民地における英語教育はキリスト教の布教活動とかわった。宗教が日常生活に大きな影響をもつインド社会において、東インド会社はそれが抵抗の火種に

なることを懸念し、キリスト教の布教活動に対して一定の距離を保った。第2に、複雑で強固な階層制度をもつインドと貿易するために現地の支配層と交渉することが重要であり、そのため彼らの言語と文化と習慣を学ばなければならなかった。初期の教育政策はこうした事情を反映し、東洋の文化を尊重する姿勢を保持したのである。

1813年、イギリス議会は東インド会社によるアジア貿易の独占を禁止し、インド統治法を制定した。インドの教育の発展のために年間10万ルピーの助成金の提供を決定し、その運用機関として公教育委員会を設置した。1834年にインド評議会の委員を務めるためにインドに赴いたマコーレイは、すぐにその教育改革に着手し、まず予算の使途を見直した。

「インドの教育にかんする覚書」はとくに2つの面で当時の時代思潮を反映する。19世紀のイギリスの歴史家と言えば、そのほとんどが保守主義者だった。ギリシャとローマの古典に精通し、近代国家イギリスの歴史的発展を主著『イギリス史』で進歩史観にまとめたマコーレイはその典型である。「インドの教育にかんする覚書」のオリエンタリズム批判の背後に、東洋趣味を称揚した革命思想の流れに対する嫌悪がある。英語教育をインドの進歩の歴史的必然としてとらえた人びとをアングリシストとよぶ。インドに赴任したマコーレイは、彼の保守主義思想をアングリシストの支持として表明し、英語教育を通してインド人の啓蒙と教化を進めるべきだと主張した。もう1つの面は、「インドの教育にかんする覚書」で彼がつかう表現、「市場の動向」が示唆する自由主義経済学への依拠である。マコーレイによると、インド人は自然に英語を学ぶ。なぜなら英語は明らかに有益であり、学ぶ価値があるからである。ところが公教育委員会は助成金を提供し、それによって役に立たないアラビア語とサンスクリット語の学習を奨励している。それは市場の原理に反する行為であり、望ましくない。直ちに方針を変え、市場の需要に応えるべきである。

最後にマコーレイの文才に触れておこう。「インドの教育にかんする覚書」に見られるように、彼は文学作品や言語表現に高い関心をもった。詩を創作し、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジの学生だったころに詩で学長褒章を授与されたことがある。英語の「歴史書は物語として見れば際立った魅力」をも

つ、と「インドの教育にかんする覚書」に書いているが、彼自身が歴史書を魅力的な文体で書くように努めていたことが伺える。彼の伝記の1つは、彼の著作が「かつてチャールズ・ディケンズの小説と同じくらい広く読まれ、」「100年まえのオーストラリアを訪れば、どの開拓者の小屋にもマコーレイの『評論集』がシェイクスピア作品と聖書の横に置かれているのを見ただろう」<sup>3</sup>と記す。他方で、簡潔に要点を伝える文章を生産する才能に恵まれたために、その後他者の文章でよく引用され、議論を起こすための資料としてつかわれてきた。「インドの教育にかんする覚書」は数々のコロニアリズムの文章のなかでとくに広く知られており、マコーレイは悪名高い英語帝国主義者として記憶に留まることになった。

### インドの教育にかんする覚書<sup>4</sup>

トマス・バビントン・マコーレイ

訳 加藤 洋介

公教育委員会の一部の紳士たちは、1813年にイギリス議会で明確に定められた方針にもとづいて活動してきたと考えているようである。これが事実であれば、委員会を確実に変革しようとするれば新しい法律をつくらなければならない、わたしはここで提示する反論を控え、この問題について発言しなければならないことを胸に秘めておくのが賢明だと判断した。が、インド評議会の委員であるいま、公に発言するべきだろう。

1813年にイギリス議会在が定めた条文をどう見ても、これまでの解釈には無理があると思われる。条文は、学ばせる言語の種類、学ばせる科学の種類について具体的に定めていない。それは、「文学の再興と発展、インドの現地人有識者に対する支援、イギリス植民地住民への科学の知識の提供と普及、」これらの目的のために一定額の予算を配分すると定めている。ここで言う文学の対象はアラビア語かサンスクリット語の文学に限ると、直接的あるいは間接的に説明されることがある。また、「現地人有識者」の称号は、ミルトンの詩やロックの形

而上学やニュートンの物理学の専門家でなく、カスカス草の全効能とか神々と一体になるための秘儀をヒンドゥー人によって書かれた聖典で学んだ者だけに与えられると説明されることもある。そのように説明する人たちが条文をよく理解しているとは言えない。比較できる状況を想像してみよう。かつてヨーロッパ諸国よりも高い学問をもったがいまではすっかり後退しているエジプトで、その高等文官が「文学の再興と発展および現地人有識者に対する支援」を目的として一定額の予算を与えんとする。彼の意図を、長い教育課程をつかって若者に文字やオシリスの寓話として間接的に語られる教義体系を学ばせることだと考える者があるだろうか。猫とたまねぎを神聖視する古代儀式をできる限り完全に正確に再現する方法を学ばせることだと考える者があるだろうか。オペリスクの解説などでなく、英語とフランス語、そしてこれらの言語が中心的役割を担う科学全般の教育を実践したいのだろうと解釈するとき、意図を曲解していると正当に批判できるだろうか。

つまり、彼らが古い教育制度を維持するためにもち出す条文の箇所は、彼らの論拠として機能しないのである。むしろそれにつづく箇所は強力な反論の根拠になると思われる。予算 10 万ルピーの用途として、彼らの主張の唯一の論拠である「インドにおける文学の再興」のほかに、「イギリス植民地住民への科学の知識の提供と普及」と記されている。わたしの改革案全体にとって、これだけで十分な論拠になる。

インド評議会もこれだけで十分であると判断するなら、新しい法律をつくる必要はない。逆に十分でないと判断するなら、問題を生じる 1813 年の規定を無効にするため、短い条文を定めることを考えている。

わたしが検討を重ねてきた改革案の実行による影響は、形式的手つづきの変更にとどまる。しかし、東洋の教育制度を維持すべきだと言う人びとが議論をはじめると——それをまともな議論として見るとしても——すべての変革を拒絶してしまう。現地人が現在の制度を強く支持していると語り、アラビア語とサンスクリット語の研究の支援のための資金を一部でもほかの用途に転用すれば致命的損失を招くと警告する。この結論に到る論理的手つづきを理解することは難しい。文学の奨励のためであろうと、ほかの有益な——あるいは有益

だと見込まれる——目的のためであろうと、国庫から提供される助成金に特別な区別を設けるべきでない。明らかに住民が健康である地域に療養施設を設置する。期待した効果はあらわれないが、それでも頑なに同じ場所で運営しつづけるべきだと言うだろうか。棧橋の建設に着工してまもなくそれは不要であることがわかった。工事の中止は世論を侮辱するだろうか。所有にかんするさまざまな権利は言うまでもなく神聖である。しかし、残念ながら今日横行しているように、権利を生じないものにまで権利を拡大すれば、権利そのものを大きな危険にさらすことになる。権利の乱用になるほど所有の聖域を拡大すれば、その弊害が目立つようになり、批判を受けるようになるからである。政府がサンスクリット語とアラビア語の教員と学習者に一定の収入を与えると公約すれば、いや根拠のある期待をもたせるだけで、彼らは当然収入を期待するだろう。一部の受益者が生まれるわけだから、世間の誤った考えを正すよりもそれを容認するほうが良心的だろう。しかし、特定の言語の学習が無益であるかもしれないのに、特定の科学の破綻が明らかになるかもしれないのに、それらの言語と科学の教育を政府が強く推奨しているという議論は、わたしにはまったく理解できない。インド政府が彼らに確約を示唆したり、助成金の使途の変更を認めないと伝えたりする公文書は存在しない。仮に存在しても、助成金の使途について、なんらかの約束を通してのちの世代であるわれわれを制約することは望ましくないと反対するべきだった。18世紀に政府が天然痘の予防接種を最も厳しい手段で全国民に恒久的に義務づけたとして、ジェンナーの種痘法の発見後もそれをつづけるべきだろうか。彼らは、これらの約束の履行をだれも求めていなくても、約束をとり消すことはできないと言う。だれの将来にも貢献しない助成だが、それを受ける権利はあると言う。所有者はいないが、所有権はあると言う。だれかの貧困を引き起こすわけでないのに強奪だと言う。わたしよりも賢明な人であれば理解できるかもしれないが、わたしにはイングランドでもインドでもいつも聞かされる空論にしか見えない。それはあらゆる権利の乱用を容認するだけでなく、ほかの意見を排除してしまう。

予算の10万ルピーをどうつかうか。それは、総督が、インドの教育を最善と思われる方法で発展させることを目的としてインド評議会で自由に決定するべ

き問題だと思う。アラビア語とサンスクリット語の研究に対する助成の廃止も、マイソールのトラ駆除の報奨金の削減や大聖堂で開催される合唱公演に対する公的支援の停止と同様に、総督の決定に任せるべきだと思う。

ここで問題の核心に触れると、インド人の知的進歩のために政府から資金が用意されているわけだが、その最も有益な用途はなにか。結局、問題はこれである。

党派を超えた1つの合意があると思う。インド人の日常生活でつかわれる土着の言語は文学や科学と無縁であり、有益な書物を翻訳しようとする、別の地域の言語からことばを借用しなければならないほど貧しく未熟であることである。そのため、現状では、高い教育を享受できるインド人は知的成長のために土着の言語と異なる言語をつかうことになる。これは周知の事実である。

では、適切な言語はなにか。公教育委員会の半数の委員は英語だと言う。ほかの委員はアラビア語とサンスクリット語を強く推す。最終的判断をどう下すか。判断の基準は、最も学ぶ価値のある言語はなにか、だと思う。

わたしはサンスクリット語とアラビア語の知識をもたない。これらの言語を正当に評価するためにできる範囲で努力した。名著として高い評価をもつアラビア語とサンスクリット語の作品を翻訳で読んだり、これらの東洋語に詳しい人にインドでもイギリスでも話を聞いたりした。オリエンタリストが評価するものを知りたいし、東洋の学問を理解したいと心から思う。だが、オリエンタリストでさえ、インドとアラビアの土着の文学の総体に匹敵する価値をヨーロッパのすぐれた図書館は棚一段に収めていることを否定しない。じつは、公教育委員会のなかの東洋の教育課程の支持者も、西洋文学の本質的優越を全面的に認めている。

東洋の作家が詩の領域で秀でてしていること、これはほぼ定説だろう。それでも、アラビア語やサンスクリット語の詩がヨーロッパの大国の詩に劣らないと大胆に論じるオリエンタリストを、わたしは知らない。想像の創作から事実の記録や抽象原理の思索に目を向けると、ヨーロッパ人の優越は絶対的に揺るがない。歴史学についてけっして誇張でなく言うと、サンスクリット語で書かれたすべての文献から歴史の情報を集めても、イングランドのパブリックスクールでつ

かわれるごく一般的な概説書の次元にも及ばない。自然哲学と道徳哲学のすべての領域でも、イングランドとインドの優劣はほぼ同様である。

具体的にどのような状況があるか。われわれは、現時点で母語で教育を受けられない民族の教育、なんらかの外国語の教育の責務を負う。あらためてわれわれの言語がそれだと言う必要はないだろう。ほかの西洋語と比べても英語は別格である。想像の創作ではギリシャの遺産の最高傑作に見劣りしない作品を多数もつ。さまざまな種類の演説を組み立てるための表現は豊かである。歴史書は物語として見れば際立った魅力をもち、倫理と政治学の教科書として見ればほかを凌駕する。人間の生とその本質にかんする表現は的確で力強く、英語で表現された形而上学と道徳と政治学と法学と商学は最も深い思索に達する。健康的で快適な生活の拡大と人類の知的進歩に寄与する英語圏の実験科学は、あらゆる領域で正確な知の貯蔵庫である。英語を理解する者には、最高の知的文化を誇る国々が90世代をかけて築いた膨大な知の遺産がいつも身近にあるのだ。いま読める英語文献の価値は、300年まえの世界中の言語で書かれた文献の総体よりもはるかに大きいと言ってよいかもしれない。ほかにもある。英語はインドで支配階層がつかう言語である。議会で現地人の高官がつかう。東洋の全海域でつかわれる通商の言語になるかもしれない。ヨーロッパ人の主要国として年々地位を高め発展をつづけている南アフリカとオーストラリアでも英語がつかわれている。これらの地域とインドで拡大したイギリス帝国の関係はますます深まっている。要するに、英語文献の本質的価値とインドの特殊な状況を鑑みれば、われわれの統治する現地人にとって英語が最も有益な言語であることは明白である。

目のまえの問題は単純である。われわれは英語を教えることができる。それでもあらゆる領域で英語圏に見劣りする著作しかないと広く考えられている言語を教えるべきだろうか。われわれはヨーロッパの科学を教えることができる。それでも説明の異なる部分では例外なくヨーロッパの科学よりも稚拙であると広く考えられている科学を教えるべきだろうか。われわれは合理的哲学と正しい歴史を教えることができる。それでもイギリスの獣医が赤面するような医学をわざわざ公金をつかって推奨するべきだろうか。イギリスの全寮制学校の女



子生徒が失笑するような天文学を推奨するべきだろうか。身長 30 フィート、在位 3 万年の王が次々に登場する歴史や、蜜やバターの海があらわれる地理を推奨するべきだろうか。

参考になる経験がないわけではない。歴史をふり返ると数個の類例があり、みな同じ教訓を伝える。近代だけで記憶に残る出来事は 2 つある。それらの出来事は社会全体に強い衝撃を与え、古い慣習を排除し、知の普及と趣味の洗練に貢献し、無知で野蛮だった国家に芸術と科学をもたらした。

第 1 の事例は、15 世紀末と 16 世紀初頭の西洋諸国で見られた大規模な文芸復興である。当時、読む価値のある書物は古代のギリシャ人とローマ人によって書かれたものだという理解がほぼ共有されていた。今日のイギリスの発展はあっただろうか。もしわれわれの先祖がこれまでの公教育委員会のような態度をとっていたら。もし彼らがキケロやタキトゥスの言語に目を向けなかったら。もし彼らが島国の古い地方語だけを見ていたら。もし彼らがアングロサクソンの年代記やノルマン人のフランス語で書かれたロマンスだけを印刷し、大学教育で論じていたら。今日のインド人にとって英語がもつ意味は、トマス・モアやロジャー・アスカムの同時代人にとってギリシャ語とラテン語がもった意味に相当する。いま英語で読める文献の価値は古典古代の文献のそれよりもはるかに大きい。サンスクリット語の文献は、われわれの先祖であるサクソン人やノルマン人が生産した文学と同程度の価値ももたないのではないか。歴史のようないくつかの領域では、まちがいなくその差は歴然である。

第 2 の事例は目のまえで進行中であると言えるかもしれない。十字軍以前のわれわれの先祖と同じように野蛮だった国家が、過去 120 年間に無知からゆっくり目覚め、ほかの文明国家と並ぶようになった。ロシアである。今日のロシアの教育を受けた層は厚く、国家のために最高の能力を発揮できる人材は豊富である。彼らはパリやロンドンの最高の社交クラブが誇る名士たちにもけっして見劣りしない。われわれの祖父の時代におそらくパンジャブ地方よりももっと後れていた国家が、われわれの孫の時代にフランスとイギリスに肉薄する勢いである。これは明確な根拠にもとづく予測である。ロシアはなぜこのような発展を遂げたか。土着の古い慣習を称揚したからではない。無教養な父親の世

代が信じた老婆の物語をモスクワの若者にたくさん聞かせたからでも、守護聖人ニコラスにかんする事実無根の伝説を彼らに詰め込んだからでもない。天地創造は9月13日だったかという大問題の考察を奨励したからでもない。こうした事柄に詳しい者たちを「現地人有識者」とみなしたからでもない。そうではなく、情報量において最大の外国語を教え、その知を学ぶ機会を与えたからである。西ヨーロッパの言語がロシアを文明化したのである。それがタタール人に与えた恩恵をインド人に供与できない理由はない。

理論的に考えても、過去の経験の照らして考えても、わたしの提言は望ましいように見えるが、反対者はなにを語るか。彼らによると、現地の一般人の協力を確保する体制を築くべきであり、そのためにはサンスクリット語とアラビア語を教育するほかないという。

知的に高い発展を遂げた国家がそれよりも低い次元にとどまる国家の教育を担うとき、必ず学ぶ側の意向をとり込んで教育課程を定め、教える側にそれを履行させるべきだという考えがある。わたしはこの考えを絶対に容認できないが、反論するまでもない。なぜなら明白な事実が示すように、現行の制度を維持しているにもかかわらず、われわれは現地人の協力を確保していないからである。学ぶ側の希望を過度に尊重し、そのために知の健全なあり方を損なうことは望ましくない。だが、じつのところ、われわれは学ぶ側の希望も知の健全なあり方も尊重していない。現地人の望む知を提供しているわけではなく、彼らが嫌う粗悪な知を無理に学ばせているのである。

英語の学習者は自ら金を払って学ぶ。アラビア語とサンスクリット語の学習者は学ぶことに対して金を要求する。これを見てもわたしの主張が正しいことは明らかである。広大なイギリス帝国において助成金の給付がなければ土着語の教育をだれも求めないことは明らかだが、現地人は自分たちの宗教の言語である土着語に愛着をもつと一般に信じられているため、知的な人でもこの明白な事実を忘れてしまう。

わたしの手もとにマドラサ大学の1833年12月の月次報告書がある。アラビア語の学習者はおそらく77人であり、全員が公的給付を受けている。その総額は毎月500ルピーを超える。裏面に、英語を学ぶ非正規の学生から今年5月か

ら7月までの3か月間に103ルピーの純利益を得たと報告がある。

わたしはインドに来て日が浅いからこのような事情に驚くのだと言われたり、金を払って学ぶ習慣がインドに一般にないのだと説明されたりした。そのように説明されて、わたしは納得するどころか自説の正しさを確信するだけである。なぜなら興味をもつこと、利益になることを行なう人に対して金を払う必要のないことは世界共通の明白な真実だからである。インドでも同じである。空腹時に米を食べる。寒い時期に毛織物を着る。だからといってインド人は金を要求しない。もっと関連する例を挙げると、村の学校で文字やごく初歩的な算数を学ぶ児童は金を求めない。むしろ教員が報酬を得る。では、なぜサンスクリット語とアラビア語の学習者に金を払わなければならないか。答えは明らかである。学ぶ苦勞に見合う利益を得られないことが広く知られているからである。この種の問題の検討において、市場の動向はつねに重要な指標を提供する。

求められれば、自説の論拠となる多数の事例を提示できる。かつてサンスクリット大学で学んだ数人が、昨年、公教育委員会に陳情書を提出した。内容はこうである。彼らはこの大学で10年間または12年間学んだ。ヒンドゥーの文学と科学の知識を習得し、それを証明する証書を得たが、そのすべてが彼らのどんな利益になるか。「証書を保持していても、」と彼らは言う。「貴委員会の寛大な支援がなければ現状の改善はほぼ見込めず、現地人の支持や支援をまったく期待できないばかりか、彼らの大多数の無関心にさらされる。」そのような窮境にあるので、名誉や高収入を約束されなくても、せめて生活保障を得られる官職を総督に紹介してほしい。「一定の水準の生活とよりよい人生を営むための手段を望んでいるが、それらを手に入れるためには、われわれが子どものころからわれわれの教育と成長を見届けてきた政府の支援が不可欠である。」最後に、教育課程であれほど寛大だった政府は、貧困と孤立無縁に陥っている人間をけっして見放さないと信じていると悲痛な調子で訴え、陳情書を結んでいる。

政府に対する補償の陳情をこれまでになんどか見たことがある。なかには理不尽な要求もあるが、損失または不当な扱いを被ったという不満が必ず根底にある。無償で教育を受けたこと、すなわち12年間公的支援を受け、文学と科学の知識を習得し、社会に送り出されたこと、これに対する補償の請求はまちが

いなく過去に例がない。彼らは彼らの受けた教育を損害と表現する。損害を受けたからその補償を請求する、という理屈である。給付金を受給したものの、補償としては十分でないとも訴えるが、正当な主張だと思う。生活の糧はおろか敬意も得られない知識のために人生の最良の時期を浪費したのだから。彼らのような役立たない不幸な人間の育成につかわれた費用を、別の有用な目的のために留保することはもちろん可能だった。周囲から軽蔑され、公金で養われる人間を育成するための経費を削減することはもちろん可能である。にもかかわらず、現在の政策は逆にそれを推進する。われわれは真理と虚偽の対立においてせめて中立の立場で傍観することもない。現地人がその生来的性質のために退行していくのを傍観するだけでは物足りないのである。すでに数々の障害が東洋の健全な科学の進歩を妨げているというのに、われわれはさらに新しい障害を追加する。真理の普及にさえつかわれぬ助成金と報奨金を、偽の書物や偽の哲学のために浪費しているのだ。

その結果、まさにわれわれが恐れる害悪を拡大し、もともと存在しない敵意を喚起する。アラビア語とサンスクリット語の大学に資金を投じることは真理探究の大義にとって損失になるだけでなく、謬見に満ちた人間の育成を奨励する。そのなかから絶望的な求職者たちが生まれ、感情と学問的立場の両面から有益な教育制度に対していつも否定的意見を語る敵対者の集団を形成する。わたしの教育改革案に対して現地人から反対の声が上がるとすれば、それはわれわれが築いた教育制度の産物である。われわれの給付金を受給し、われわれの大学で訓練された者たちが反対を先導する。現在の制度が長くつづくほど反対は大きくなる。いままさに給付金を受給している学生たちが今後敵対者の集団に加わるから、集団は増大しつづける。逆に、われわれが介入しなければわれわれが恐れる現地社会の不満は生じない。すべての雑音はわれわれの介入から生じ、問題の発端はわれわれが醸成してきた東洋への関心にある。

別の事実に目を向けても、われわれの介入がなければ、古い制度の支持者指摘するような感情が一般のインド人に見られないことは明らかである。公教育委員会は、アラビア語とサンスクリット語の書籍の印刷費として10万ルピーを超える費用を適正と判断してきた。ところが、だれも買わない。ほとんど1冊

も売れないのである。二折版と四折版が大半を占める2万3000冊の書籍が公教育委員会の図書室に——むしろ物置とよんだほうがよい場所に——詰め込まれている。委員会は一部を寄贈することで膨大な東洋の文献を減らそうと努力しているが、それを上回る速度で新しい書籍が印刷されている。わたしにはすでに山のように膨大であるように見えるが、無駄紙の束をもっと増やすために年間約2万ルピーが空しく消費されている。このやり方で過去3年間に約6万ルピーが費やされた。同時期のアラビア語とサンスクリット語の書籍の売上高は1000ルピーにわずかに届かない。他方で、教科書協会は毎年7000部から8000部の英語の書籍を売り、印刷の諸経費を賄うだけでなく、経費の2割に相当する利益をもたらしている。

ヒन्दゥー法の研究は主にサンスクリット語の文献で行なうべきだとか、イスラム法の研究は主にアラビア語の文献で行なうべきだとよく言われるが、この議論をサンスクリット語とアラビア語の推奨の根拠にすることはできない。なぜならすでにイギリス議会はインドの法律の体系化と成文化をわれわれに指示し、この目的のために法律委員会の協力を与えると約束したからである。われわれの法律が公布される瞬間に、ヒन्दゥー法とイスラム法の積義はインドの検察官や裁判官にとって価値を失う。わたしは、これからマドラサ大学やサンスクリット大学に入学する若者が課程を修了するところにはこの大事業は完成すると期待し、またそう確信している。若者が社会人になるまえに現在の法律を変えようとしている状況で、その解釈を学ばせるのは明らかに賢明でない。

理解することはもっと難しいと思われる別の反論もある。サンスクリット語とアラビア語は1億人にとっての聖典の言語であり、特別の奨励に値するという主張である。言うまでもなく、イギリスのインド政府は、宗教にかんする寛容と中立の維持をつねに心がけなければならない。しかし、最も重要な問題を最も拙劣に説明し、それによってそれ自体にわずかな価値を付与しているような文献を学ばせることは、理性と道徳に反する教育であり、宗教の中立、すなわち神聖であり保護されなければならないと一般に考えられている原理を壊しかねない。推奨される言語に有益な知が含まれないという事実が見失われてしまう。荒唐無稽の迷信が豊かであるからその言語を教える、偽の宗教と関連す

るから偽の歴史や偽の天文学や偽の医学を教える、というわけである。現地人の改宗を目的とするキリスト教の活動が行なわれているが、われわれは公的にいっさい支援していないし、今後もけっして支援しない。それでもわれわれはサンスクリット語とアラビア語を推奨し、それを通してロバに触れて身を清める方法とか、唱えればヤギ殺しの罪を放免されるというヴェーダの聖句の無益な学習を現地の若者に課し、その代償として国費から賄賂を給付している。このような教育を健全かつ賢明なものと言えるだろうか。

東洋の学問の教育を推奨する人びとは、インドで英語教育を試みても、その成果はせいぜい片言の英語の習得にとどまると思い込んでいる。彼らはその論証を試みず、思い込みを語りつづけるだけである。異なる立場から提唱される英語教育を、彼らは綴り字教練と蔑む。ヒンドゥー語やアラビア語の文献を深く学ぶか、英語の初歩を浅く学ぶか、ほかに選択肢はないと彼らは頑なに信じている。それだけでなく、合理的思考や経験則をまったく容認しない。だが、われわれが知るように、どんな外国籍の人にも、英語が含む最も難解な知や多彩な慣用表現をつかう英語作家の精妙な表現効果を理解できるほど英語を熟知する人はいる。この地域にも英語で政治や科学を流暢かつ正確に論じられる有能な現地人はいる。わたしは、ここでの主題である教育問題について1人の現地人の紳士が公教育委員会のだれも賛辞を惜しまないほど広い視野と高い知性で議論するのを見たことがある。英語を多数のヒンドゥー人に認められる高い能力で正確に話す外国人は、ヨーロッパ大陸の知識層にもひじょうに少ない。ギリシャ語を学ぶイギリス人に比べれば、ヒンドゥー人は明らかにもっと少ない苦勞で英語を学べる。それでも聡明なイギリス人の若者は、不幸なインド人学生がサンスクリット大学で卒業まで過ごすよりもずっと短い期間で最良のギリシャ人の著作を理解し、楽しめるようになり、彼らのギリシャ語をすらすらと話せるようになる。ヒンドゥー人は、イギリス人の若者がヘロドトスやソフォクレスを読めるようになるまでに要する期間の半分以下で、ヒュームやミルトンを読めるようになる。

以上の議論は次のいくつかの事実を明らかにすると思う。イギリス議会在が1813年に定めた条文はわれわれを制約しない。直接的あるいは間接的に表明さ

れたどんな約束もわれわれを制約しない。われわれが資金の使途を決定するべきであり、最も学ぶ価値のあるもののためにつかうべきである。英語を学ぶ価値はサンスクリット語やアラビア語を学ぶ価値よりも大きい。現地人が学びたいものは英語であり、サンスクリット語やアラビア語でない。サンスクリット語やアラビア語を法律や宗教の言語として特別に奨励するべき理由はない。高い能力で英語を話すインド人の育成は可能であり、われわれはその目的のために努力するべきである。

公教育委員会のなかでわたしと多くの点で異なる意見をもつ紳士たちであっても、一点ではわたしと完全に認識を共有できる。すなわち、われわれは限られた手段しかもたないため、インド人の全体を教育できないことである。いまわれわれにできることは、われわれとわれわれの支配する数百万人のあいだに立って通訳できる人びと、血と肌の色においてインド人だが趣味と思考と道徳と知性においてイギリス人である集団の形成に力を尽くすことである。インドの土着の言語を改良し、それを西洋の科学用語の借用によって豊かにし、巨大な人口の民衆に知を届けられるように少しずつ改変していく仕事を、彼らに担わせればよい。

すべての既得権益について、わたしは最大限に配慮するつもりであり、適正であればすべての助成金の給付をつづけるべきだとさえ考えている。しかし、われわれが維持してきた制度については、弊害を及ぼすから抜本的に改革するつもりである。アラビア語とサンスクリット語の書籍の印刷を直ちに止め、カルカッタのマドラサ大学とサンスクリット大学を廃止する。ヒンドゥー教の学問の最大の拠点であるバナレスのサンスクリット大学と、アラビアの学問の最大の拠点であるデリーのムハンマド大学の存続を認めるだけでも、これらの東洋語の保護として十分である（私見では過大である）。これらの大学の存続が必要であるなら、少なくとも将来に補償を請求するかもしれない学生にいったい給付金を与えないこと、望まない学問を学ばせるための賄賂を与えず、ほかの教育制度で学ぶ選択肢も示したうえで自由に選択させることを提案したい。これによって使途の自由な資金を確保できるので、カルカッタのヒンドゥー大学に対する助成金を増額したり、フォート・ウィリアムやアグラのような主要地

域に充実した英語教育の学校を設置したりするなどの改革を実行できる。

イギリス評議会の会長がわたしの期待する決定を下すのであれば、わたしは直ちに全力で義務を遂行するつもりである。逆に、政府が現在の制度の現状維持を望むのであれば、わたしは公教育委員会の委員長を辞任する考えである。なんの貢献もできないだろうし、ただの妄言だと確信するものを称揚するかのようふるまうことを強いられることを恐れるからである。現在の制度は真理に向かう前進を支援するものでなく、時代錯誤の妄想の自然消滅を阻むものでしかない。現在の公教育委員会はその立派な名称にまったくふさわしくないとと思う。むしろ公金浪費委員会が妥当だろう。印刷まえの白紙のほうが有益であるような書籍を印刷し、荒唐無稽の歴史や形而上学や物理学や神学の普及に積極的に努め、就学期間に奨学金が及ぼす大きな影響力と弊害を懸念しながらそれに依存し、やがて生活できなくなるか公金に依存しつづけることになる研究者を無益な教育を通して生産するのだから。以上が私見である。活動方針を抜本的に転換しなければ、公教育委員会は無用であるばかりか有害であると言わざるを得ない。いっさいかわりたくないと考えるのは自然であろう。

## 注

- 
- <sup>1</sup> Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism* rev. ed. (1983; London: Verso, 2006) p. 91. ベネディクト・アンダーソン『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石さや・白石隆訳 (N T T出版、1997) 153 ページ。
  - <sup>2</sup> Homi K. Bhabha, *The Location of Culture* (London: Routledge, 1994) p. 125. ホミ・K・バーバ『文化の場所——ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也ほか訳 (法政大学出版社、2005) 151 ページ。
  - <sup>3</sup> Margaret Cruikshank, *Thomas Babington Macaulay* (Boston: Twayne, 1978) p. 13.
  - <sup>4</sup> 翻訳にあたって、G. M. Young, *Macaulay: Prose and Poetry* (London: Rupert Hart Davis, 1952) を定本として用いた。